

第10回 「J.T.の森積丹」 秋の森林保全活動を開催！



左／八木宏樹小樽商科大学商学部教授 中央／河村博町環境生態系保全技術アドバイザー 右／永田亮子 J.T.C.S.R 担当執行役員

10月3日に日本たばこ産業株式会社（以下「J.T.」）と協働しての森林保全活動「J.T.の森積丹2015秋」が開催され、永田亮子CSR担当執行役員をはじめとするJ.T.社員や家族の皆さんのほか、国・道の機関など、町内外から約130人が参加しました。

記念すべき第10回目の今回の森林保全活動は、あいにくの天候により、当初予定されていた積丹川流域エリア内更新伐跡地への植樹は行えず、総合文化センターでの開催となりました。今回の活動では町環境生態系保全技術アドバイザーの河村博

氏による「森・川・海のつながりを支える森の神さまのくら」と題した熊の生態についての講演が行われ、河村氏が研究活動を行う上で出会った熊とのエピソードや、適切な熊との「距離感」についての講話が行われたほか、八木宏樹小樽商科大学教授による、同大が町や関係団体と連携をとりながら現在取組を進めているサケ類資源回復やウニ殻の有効利用についての講話も行われ、参加者は余別川の貴重な河川環境をはじめとした自然環境保全への関心を高めていました。

毎回町内の海産物や農産物を

贅沢に使用し、参加者が心待ちにしている昼食では、美国婦人会（戸来和子会長）から町内産の食材を使用したホットケのすり身汁等が振る舞われ、おかわりに列が出来る好評でした。午後からはドングリなど森の中から採取した材料を使用した「木製マグネット作り」が行われ、それぞれが思考を凝らした作品を作り上げていました。今後もJ.T.社員の皆さんをはじめ、地域や関係機関の皆さんに協力をいただきながら、森・川・海をつなぐ「水源の森づくり」の実現に向けて活動を進めていきます。

J.T.取締役会長

丹呉泰健氏も初来町

9月4日、丹呉泰健J.T.取締役会長が来町し、「J.T.の森積丹」美国川・余別川流域エリアや島武意海岸、神威岬などを視察されました。

小泉内閣総理大臣秘書官、財務事務次官などの要職を歴任された丹呉会長は昨年6月の同社会長就任後、初めての来町とな

りました。

この度の来町では「海を育む水源の森に」を理念とした「J.T.の森積丹」の実

践地の優位性や可能性に高い関心を寄せられるとともに、半島先端の地の多様な地域資源の豊かさ等に対し、地域活性化への期待を込めた激励と、「J.T.の森積丹」活動事業に対して当町への感謝の言葉をいただきました。



▲河村町環境生態系保全技術アドバイザーから説明を受ける丹呉会長（左）

9月26日、総合文化センターで、栗原クリニック東京・日本橋院長の栗原毅医師と同院の栗原丈徳歯科医師を講師に招き、「2015年度海洋センターを活用したコミュニティの再生に関するモデル事業」の一環として第1回町民文化講演会が実施され、町内外から72名が参加しました。

第1部では、栗原毅医師による「健康に生きるために」と題した基調講演が行われ、食事と健康の関係、先生が研究を行っている緑茶の効能が紹介されたほか、健康に生きるために「歩くこと」の意義や効果等についても紹介され、参加者の運動習慣と健康意識の向上を図るとともに、町が実施している各種ウォーキング事業への積極的な参加を促しました。

第2部では、栗原丈徳歯科医師による「口から始まる健康」と題した実技講演が行われ、口の中を健康に保つことが認知症の予防や健康寿命を延ばすことに繋がることが説明され、先生の指導の下、実際に口を動かす運動をしたほか、義歯についての説明も行われました。

最後は、総合文化センター横で株式会社伊藤園より提供いただいたヤブキタ茶と栗原毅医師より紹介いただいた狭山茶の苗木の記念植樹を実施し、健康意識の醸成を目的とした講演会は終了しました。



(奥左から) 杉野弘幸 (3年)、長谷川颯 (3年)
越前元喜 (2年)、長谷川順信 (2年)
(手前左から) 入間川陸翔 (2年)、長島晃介 (2年)
斉藤丈瑠 (1年)

初出場・初優勝の快挙！ 美国中駅伝部 第45回後志中学校駅伝競走大会

美国中学校駅伝部が9月11日に黒松内町で開催された第45回後志中学校駅伝競走大会に出場し、見事優勝に輝きました。同部は、今年度から美国中学校に着任し、前任地の蘭越中에서도駅伝部を率いた伊藤睦美教頭の呼びかけで結成。他の部活動と兼務となるなど、心身共に苦しい練習となることが予想され

ながらも、その呼びかけに応えた7人の選手達は7月25日から練習を開始。一回の練習に充てられる時間は他の部活動開始前の約30分、大会までの練習回数は22回、この少ない練習時間で優勝を狙うチームを目指すべく試行錯誤を繰り返し、今回の栄冠を勝ち取りました。練習を通して「積み上げるこ

と」の大切さを伝えてきた伊藤教頭は駅伝部の選手達を「積丹の子ならではの感性・野性が武器で、大きな可能性を感じている。前任地と同じだけの練習量を確保できるなら全国も視野に入る。」と話し、この約一か月間の間に「陸上競技者」として進化し続けた選手達を高く評価していました。

また、同部は10月18日に新得町で開催された第33回北海道中学校駅伝競走大会にも出場し、こちらは入賞が叶いませんでしたが、選手たちは悔しさを大きくにじませ、冬期間を控えて一時活動を終えた同部ですが、選手たちからは「次の練習はいつやりますか？」という声が伊藤教頭へ相次いでいるそうです。「勝ったり負けたりする人種と、勝ったり負けたりもしない人種。どうせ生きるなら勝ったり負けたりする人種でいたい！」伊藤教頭が部活動指導で伝え続けてきた思想。創部から僅かな期間で「勝った喜び」と「負けた悔しさ」の両方を経験した選手達の成長をたたえ、今後の選手達の活躍を温かく応援していきたいでしょう。

北海道と管内13町村・原発重大事故を想定 道原子力防災訓練を実施

10月21日、北海道電力泊原発の重大事故を想定した北海道原子力防災訓練が、積丹町を含む泊原発より30km圏内にある後志管内13町村と北海道の主催で行われました。

訓練は、7時25分頃、後志内陸部を震源とする震度6強の地震が発生、積丹町の震度は5弱で、津波の発生は無いとの想定に基づき、午前8時30分から開始されました。

今年の訓練では、積丹町への放射性物質の放出は無く、屋内

退避の防護措置となったことから、町民の皆さんの町外への避難はありませんでしたが、万が一に備え、札幌市と共同で積丹町の一時滞在場所となっている札幌市西区体育館の避難所開設を実施したほか、町観光協会等の協力のもと、観光客への情報伝達訓練を実施しました。また、昨年度と同様、学校や町民への通信連絡訓練や職員による町内各所での放射線量の測定を実施しました。

原子力事故はあつてはならない意識の更なる向上をお願いします。



一時滞在場所開設を行った西区体育館（札幌市）

いことですが、非常事態はいつ訪れるかわかりません。

もしもの時に適切な行動がとれるよう、日頃から防災意識を高め、「自分の身は自分で守る」という意識の更なる向上をお願いします。

～コミュニティ助成事業～ 除雪機購入等を助成

余別自治会は、財団法人自治総合センターが地域の自治会活動等を推進するために助成を行っているコミュニティ助成事業を利用して除雪機や除雪機格納庫、防災備用品保管庫を購入しました。

この事業は同センターが全国自治宝くじの普及を目的に行っているもので、社会や暮らしなど私達の身の回りで役立っています。



▶ 除雪機

防災備用品保管庫（右）
除雪機格納庫（左）



交通事故死 ゼロの日 5,500日達成

去る9月5日に交通事故死ゼロ5,500日を達成した町に對し、10月13日、総合文化センターで、北海道知事からの感謝状及び北海道交通安全推進委員会からの表彰状が贈られ、橋本後志総合振興局長より松井町長へ伝達されました。

町議会議員や町交通安全関係団体等が参列した伝達式では、賞状の伝達、橋本後志総合振興局長と村部余市警察署

長へ伝達されました。今後「輪禍の無いまち積丹町」。今後もこの記録が続くよう町ぐるみで交通安全への取り組みを進めていきたいと思います。

局長の祝辞に続き、松井町長が「記録達成は町民と関係団体の交通安全運動へのご協力の賜物、更に記録を伸ばせるよう、住民一丸となつて運動を続けていきたい。」と謝辞を述べました。

この記録はオホーツク管内西興部村（7,549日）（10月1日現在）に続く北海道第2位の記録で、夏場には札幌圏をはじめとし



橋本後志総合振興局長（左）と松井町長